



質量式立体映像の工口的利用法

XXX Solid Vision

GLAMOUR WORKS

ADULT ONLY



質量のある立体幻像はデュエルの世界に革命をもたらした  
開発元は、この技術を新ルール「アクションデュエル」に用いる  
程度に考えていたが、とあるデュエリストの登場により  
大きな変化がおきた

当初の構想では、いわばデュエリストに遊園地の乗り物に乗って  
もらうようなものであったが、  
エンタメデュエルと称するその  
手法は、モンスターに乗ることを  
即興のライディングデュエルの  
ように見せ、観客を意識した演出  
を行うことにより、単なる勝ち  
負け以上の魅力を生み出したのだ





このようにデュエリスト達は、各々が独自の楽しみ方を見出していった

「プレイヤーにダイレクトアタック！」

「きゃっ！」

「やったー！パンチラげっつ！」

「うひょお！編パン！シビれるうッ！」

「もう！遊矢お兄ちゃんのエッチ！」

「……ゆうやアアアッ！」

「ま、待て袖子！わざとじゃない！」





世間で微笑ましいやりとりがなされている一方、世にマニアの種は尽きまじ…

「……さて改造データのインストールは、これでよし……と」

『そろふれいもーど、すたーと』  
電子音声とともにデュエルディスクが起動する

「フラックマジシャンガール召喚！」  
部屋の中にひとりの少女が光とともに浮かび上がった

「さあ、ちゃんと動いてよね……」



「手札より速攻魔法『強制脱衣』発動!!」  
ガラスの割れるような音とともに少女  
の服が砕け散り、白い裸身が露わになる  
形よく大きな乳房が、ぶるんと揺れるが  
少女は無表情のまま立ち尽くしている  
それもそのはず、この少女はゲームの  
キャラクターで立体幻像なのだった





「おお……こ、これがブラマジの生乳……」  
少年の手が白い乳房を包むと始めはため  
らいがちに、やがては思うままにその双丘  
をこねくり揉みしだく  
「や、柔らかい！それに温かい……」  
少女：ブラックマジジャンガールは、特に  
反応もせず立っている

「苦労したけど、改造データを手に入れて  
よかったら、最初は触れるブラマジって  
だけで喜んでたけど、結局のところ硬い  
マネキンでしかないものなあ……」

「よっと……」  
少年はブラックマジシャンガールの  
両足を抱え上げると頭の高さにまで  
持ち上げた  
元々空中に浮遊するように立体幻像  
が投影されているため、特に倒れる  
ようなこともなく、ブラックマジシヤ  
ンガールは、少年に股間を突き出す  
ようなポーズのまま固定されている

この状態は、等身大の関節人形のような  
ものなので、好きなようにポーズを  
つけることができるのだ





「……うわぁ、よくできてるなあ……」  
少年はブラックマジシャンガールの  
股間を押し広げながら感嘆する

そこには人体と変わらぬ性器が艶め  
かしく再現されていた  
そのピンク色の肉壁は、そこだけ映  
せば立体幻像だと思ふ者はいないだ  
ろうという出来で作り上げられてる







「よ、よし、じゃあいくよブラマジ……」  
少年は、先ほどから痛いくらいに勃起し  
していた己の分身をスポンから取り出す  
とブラックマジシャンガールの股間に  
押し当てた



「んっーくう!!」  
少年は、二気に己の分身をブラック  
マジシャンガールの股間に突き刺す  
温かく柔らかい肉壁が少年の分身を  
包み込み押し返そうとするが、少年  
はかまわず腰を前後させ、その感  
触を堪能する

「凄いー凄いよブラマジー!  
その辺のオナホなんか比べもの  
にならないや!!」





「ふう……」  
ブラックマジシャンガールの股間  
からは、どろりとした白濁液が滴り  
落ちる

「さて次はバックからにじてみるか」  
少年の股間は全く衰えていなかった



「フィールド魔法『セックスワールド』を発動！」

ざわりと部屋の雰囲気が変わった  
部屋の光景は、なにひとつ変わってない  
だが確かに空気が変わっていた

「え？あ、あれ？私…裸?! ええッ?!」  
部屋の中に少女の音が響く  
それは裸身を晒した少女……  
ブラックマジシャンガールの声だった

「マ、マスター！私なんで裸……」  
顔を赤らめたブラックマジシャンガール  
が少年に問いかける





「本当…苦労したんだよ……」

「このカードを手に入れるのはさ」

「え？マスター……なにを？」

「さあ、君の大事な部分を僕に

よく見せて……」

「え……ああ！か、体が勝手に……」

「僕の命令には忠実に従うようにな

っているのさ。ほうらどうだい？」

「いや！は、恥ずかしい！

やめて！やめてくださいマスター！」



「このカードには簡易AIが仕込んであってね。発動すると簡単な会話やセックス関係限定の反応をモニターにさせることができるようになる」と言うわけなんだわかったかい？ プラマジ」  
「よくわかりません……」  
「うん……まあ……そうだろうね……」  
「じゃあ、やることやっちゃおうか」  
「あーだ、ダメですうーい、いきなりそんな！ こ、心の準備が……」  
「おーやっぱり受け答えがあるだけで大分違うなあ……手触りが柔らかいだけじゃ物足りないものなあ」





「ひいッ! マ、マスター!!  
も、もっどゆっくり……  
優しく……お願い……しますうー!」

「おうッ!? 膣内がうねってる!!  
こんなとこまで変わるのか!」

「アアッ! そんな激しく……!!  
こ、壊れちゃう!!」

「こんな気持ちいいのやめられないよ!  
そら! どうだい! プラマジック!」

「あひいッ! ひいん! うらッ!」



「うう……酷いですう……」

「ハハハ……ごめんよブラマジ……君の膣内が、あんまり気持ちよくてさ」

「そんなに私の……よかったですか？」

「ああ、最高さ！君を手に入れて僕がどれだけ幸せか口では説明じきれないくらいだ」

「マスター……」





「…じゃあ許してあげますけど……  
今度は私がシテあげます…ね?」  
「え?そんなこともできるの?」  
「できますよお…動かないでくださいね」  
「ブラックマジシャンガールは少年の前に  
跪くとその大きな乳房で少年の分身を  
優しく包み込んだ」

「おうッ!や、柔らかい!」  
「うふふ…どうです?上手いでしょ」  
「こ、こんなプログラムまであるのか…」  
「こ、こまでシテあげるの、はマスターだけ  
なんですからね!」



「うぶっ!すごい量……」  
「君の胸があんまり気持ちいいからさ  
その……ゴメン……」  
「いいんですよ。マスターのためなら  
なんでもしますから……ってあれ?」  
「あはは……また勃ってきちゃった……」  
「……もう一回します?」  
「うん!」





と、まあ一部の層ではこのように  
新技術を別な方法で楽しんでいた

しかし気をつけなくてはいけない  
うっかりデツキをそのままにして  
デュエルなどすると……

「僕のターン！ブラックマジシャン  
ガールを召喚！」

「……ん？おい……そのブラマジ……  
おまえ改造してあるな？」

「ギク！な、なんのことかな……」  
「くくく……こりゃいいい、」

実はこちらも面白いカードを  
仕込んであってね……」





「知ってるか？犯れるように改造してある  
モンスターは、それだけじゃない。  
専用の環境とカードがあり、それらで行う  
デュエルをセックスデュエルと言うんだぜ」

「な、なんだって?!」  
「いくぜ……俺のターン!!」

「フィールド魔法『セックスワールド』発動!  
続けて!!相手フィールドに性交可能な  
モンスターがいる場合、デッキよりディック  
ワームデーモンを特殊召喚できる!!」

「ディックワームデーモンの特殊効果!  
性交可能なモンスターの衣服グラを破壊し  
3ターンの間、行動を封じることが出来る!  
ストリップバインド!!」  
「きゃあああああああッ!!」





コティックワームデーモンの攻撃！  
ワームアームギャンパン！  
紫の肉塊から何本もの触手が伸び  
ブラックマジシャンガールに襲いかかる

触手がブラックマジシャンガールに  
絡みつくや何本かがその股間を貫く  
「うぎいイイッ！」

「ほ、僕のブラマジがアッ！」

ポコオ!

「おっ! おおっ!」  
音が聞こえるほどの勢いでブラック  
マジシャンガールの腹が膨れ上がった

「ディックワームデーモン」の特殊効果!  
性交可能なモンスタールと戦闘する場合  
ダメージ計算を行わず対象に妊娠カウ  
ンターを置くことができる!  
モンスタールプレグナント!

「妊娠カウンターが三つになると...  
ふふふ! 面白いものを見せてやるぜ」  
「も、もうやめてくれえ!!」  
「ほ、僕のブラマジがあ... そ、そうだ!  
サレンダー! サレンダーするよ...」

「ちえ... これからが見せ場だったのに...」

注意  
モンスタールが思い入れがある場合は、  
セックスデュエルには使用しないよう  
にしましょう。トラブルになります





さてデュエルの世界は明るく語られることばかりではない

地下デュエルというものがある  
表沙汰にはできないような社交の場で行われる非合法のゲームだ

デュエリスト達はダメージを受ければ首や腕に嵌めた拘束リングから電気が流れ実際にその肉体を痛めつけられるという残虐プレイである

そこにいるデュエリスト達はプロ崩れや犯罪者、莫大な借金を背負った者など表舞台にはでられぬような事情を抱えた者達ばかり

勝てば大金、名誉あるいは自由を得られるが、負ければその身の自由や尊厳を売り渡し、金持ちや犯罪組織の玩具に成り下がることにもなる非情のデュエル  
それが地下デュエルである



この地下デュエルの世界にも、質量のある立体幻像技術は変化をもたらしていた

それまで地下デュエルでは女性デュエリストは珍しい存在であった。またそのデュエルも負けたら慰み者といった程度であったのだが……セックスデュエルの普及により、まずもってデュエルすること自体が、羞恥プレイそのものとなっていた

「わ、私のタリン……」  
明日香は、多くの男達の好奇の視線に美しい裸身を晒しながらカードを引く

とある事情で肉体を蝕まれた兄の治療費に膨大な額が必要だった彼女は、裏デュエルのプロモーションの誘いに乗ることになった。なぜ裸でデュエルしなくてはいけないのか？彼女にはよくわかっていなかったが、ここまで来た以上、勝つ以外の選択肢は残されていなかった……





「ディルドデーモンでプレイヤーにダイレクトアタック!」

今日の対戦相手はプロ崩れの男であったその巧みなプレイで、明日香はたちまち防戦に追い込まれ、ついには壁モンスタも伏せカードもないところまで追い詰められた

明日香にゆつくりと近づくと、モンスタはその股間からは、徐々に二本の棒状の物体が屹立していく

「ひッ」  
本能的な恐怖を感じた明日香は、思わずフェンスに駆け寄り叫ぶ

「出してーここから出してー」  
だが地下デュエルの最中にそんな要求が通るはずもなかった





フェンス際に追い詰められた明日香の腰を  
モンスタアが、がっちりと抑えこみ股間に  
その逸物をあてがった

「いいいやあ！こんなのデュエルじゃない！  
だ、誰か助けてえ！助け…ツクひいッ！」

明日香の哀願は途中から悲鳴に変わった  
モンスタアの逸物が、明日香の股間を貫  
いたのだった……

フェンスに押し付けられモンスタアに犯  
されながら悲鳴をあげる明日香をフェン  
スの向こうの客達が冷笑する

「アカデミアの女王などと持て囃されて  
いても犯られてしまえばただの女だな」  
「ふふふ…まるで雌豚の鳴き声ね」





モンスターIIに抱え上げられた  
明日香の股間に極太の逸物が、  
より深く突き刺さる

「ぐッはあッ！  
アアあーッ！」

体重で、その身が沈み込むたび  
股間を貫く激痛に明日香は泣き  
わめく……









じよぼじよぼと音を立てて明日香が失禁している

電撃をその身に受けて、あちこちからぶつぶすと煙すらくすぶり続け

その美しかった肉体は、びくびくといまだに痙攣を繰り返す

その目は虚ろで焦点はあつておらず口元はだらじなく弛緩していた

モンスタリは、無造作に明日香を床に放り投げると白い肉体は崩れ落ちた

「うっ……」

明日香は氣力を振り絞って  
よろよろと起き上がった

「ほう、まだ動けるのか  
アレをヤラれて立てる女は  
初めてだな」  
その姿に観客たちからは、  
思わず声があがる

「わ、私のターン……」

ここで諦めてしまえば、待っているのは地獄  
兄どころか自分さえ救えない  
負けるわけにはいかない……

カイドをドロリした動きで、明日香の豊かな  
乳房が艶めかしく揺れた





# ディルドーホイール

いわゆるDホイールの一種で、一時期注目を浴びた地下デュエル版『アクメライディングデュエル』で用いられた

小型のモーメント機関を内蔵しているが、出力コントロールの難しさから、開催自体が少なく、あまり人気はでなかった

なにしろ女性専用の上、搭乗者がアクメに達するたびにスピードカウンタが増えるという仕様のため、速度が出るほどに搭乗者が前後不覚になりやすくデュエルの勝敗どころか、リタイア続出で試合が成立しないことが当たり前だったのだ

質量のある立体幻像技術の登場でセックスデュエルに押しされ、廃れていった



『サイコデューリスト』と呼ばれる者たちがいる

一言で言ってしまうえば超能力者精神の力でカードモンスターを实体化させると言われている

真偽不明の話が多く、殆どは嘘やトリックと思われるが、それだけでは片付けられない物証があるのも事実である

彼らの力を真剣に研究した組織が、かつて存在し、その研究の成果が裏社会に流れたというのはよくある噂話だった

セックスデュエルの流行はそのサイコデュエル研究とAR（拡張現実）幻像技術を結びつけ、奇怪かつおぞましいとも言える現実を産みだした







「ディックワームデーモンでダイレクトアタック！」  
アキの体に多数の紫の触手が絡みつき  
何本かがアキの股間に突き刺さった  
「あああッ！」

衆目の中で強姦されるといふ苦痛と  
屈辱に顔を歪めるアキ  
かつて所属していた組織のしがらみ  
で捕らえられたアキは、地下  
デュエルで勝てば  
自由にすると  
約束を信じて、  
セックスデュエル  
に身を投じていた



「ディックワームデーモンの効果発動！  
対象が性交可能な場合、バトル時に通常  
のダメージ計算を行わず妊娠カウンター  
置くことができる！」  
その言葉が終わるやいなや、アキの  
腹部が突然膨張した  
「？」信じられないものを前にして  
言葉もでないアキ

これこそがサイコデュエルと  
ARビジョンの融合技術だった

拡張現実によって対象の  
表面に沿って質量のある  
立体幻像を投影、対象の  
脳に特殊な信号を送り、  
それを自分の肉体の一部  
と誤認識させるのだ

実際のアキの肉体は  
まったく変化はして  
いないが、見た目も  
アキ本人の感触も  
それは間違いなく  
妊婦の腹だった




「俺のタインードロー！これでお前には、三つ目の妊娠カウンターが乗る！」

「ひぐらッ！」

アキの腹部がさらに膨らむ  
それにとどまらず、乳房も二回り  
膨張すると乳首が黒ずみ、  
母乳すら噴き出してきた

「さあ…出産の時間だよママ…」





モンスターがアキの足を触手で  
釣り上げ、その股間を露わにした  
既にアキの股間からは、紫の頭が  
覗き、何かが産まれ落ちようと  
している

「な、なに?!」  
噴き出る母乳をどうにかしようとしていたアキは、股間から這い出ようとしている感触に気づき怯えた声を上げる



「んんッ！だ、ダメエッ！」  
アキは、なんとかかして産道を  
押し広げながら、産まれ落ち  
ようとしている何かを手で抑え  
るが、粘液でぬるりとしたそれ  
は、そんなことでは止まらず、  
ついに外に這い出した





「いやああああアアアアッ！」

アキの絶叫が響き渡る  
己の胎内から出てきた異形の  
物体を見て半狂乱になる  
頭ではゲームの映像とわかつ  
ているが、産道を掻き分けて  
いった感触を体が覚えていた  
コレは確かに自分が産み落と  
した赤子だと彼女の子宮が、  
そう主張していたのだ



ほこおっ

アキの股間から三匹目の異形の  
落とし子が顔を出した  
ようやくのことで膨らんだ腹は  
戻ったが、既に腰が抜けたアキは  
もはや身動きもできず、ただ体を  
震わせるだけだった……





「ようやくくひりだし終わったか」  
対戦相手の苛立たしげな声をする

「ではデュエルを再開する！」

ディックワームデ川モンが孕ませた  
ワームトリクンのコントロールは、  
こちらが得る！」

手札より融合を発動！  
ワームトリクン三体を融合させ……」



「デイトックワームスポーンを融合召喚!!」

「さあ産み落とせばかりの我が子に貫かれるがいい! デイトックランス!!」

肛撃力  
2000



「おっ！うっ！おっ！おっ！おっ！」  
アキが奇怪な呻き声をあげながら  
のたうち回っていた

アキの肛門を貫いた触手は、腸を  
逆に進み十分に体内に侵入すると  
アキの体を持ち上げた  
触手は更にアキの体内を這いずり  
回り遂に口から頭を覗かせる

「さあ！ダメージを受けるがいい！」  
男の声が告げた瞬間、アキの二際  
大きな悲鳴があがるとそれきり  
静かになった……





こうして裏社会では、セックスデュエルが爆発的な人気を博した。目の前で繰り広げられる人外と美女の迫力ある痴態は、どんな映像よりも、下衆な欲望を満たしていったからだ。

しかしながら問題があった。元々プロ級の女性デュエリストは数が少なく、ましてや裏社会と関わりのある者となると、ただのセックスショーを見せても評判は良くなかった。あくまでデュエルの駆け引き、勝敗、勝利への執念、そういったものがなくてはならなかった。

しかもセックスデュエルは、激しい内容ゆえ「壊して」しまふことも多かった……

だが需要はある

こうして各地から女性デュエリストが狩り集められた

最も効率がよかつたのは、デュエルの専門校を謳い集める方法だった

こうして裏社会の出資で作られたのが裏アカデミアである

今日もまた数人の女子が、裏アカデミアに送り込まれてきた

衣服を剥ぎ取られ、首には逃亡防止用に拘束リングを嵌められた彼女たちは、セックスデュエルを叩き込まれるのだ……





狩り集められた女達は  
さっそくセックスデュエルの  
特訓に追いまくられる  
ことになった

裏とはいえアカデミアを  
名乗るだけあって確かに  
そこは教育機関であつた  
内容が酷く偏つてるだけだ

従順で成績優秀な者  
は露骨に優遇される  
ことになる

生徒間の競争や対立  
はむしろ助長された

少女たちは生き延びる  
ために段々と荒んで  
いくしかなかった！







「ヘイトドール・ベクターで  
ダイレクトアタック！」  
「うぐうッ！」

背後からモンスターがリオを犯す

それを命じるアンナにためらいは  
殆ど無い

躊躇すれば次の瞬間に  
犯されるのは自分なのだ

生き残るために  
他者を蹴落とす

それがこの  
ルールだった



「トラップ発動『予期せぬ妊娠』！」  
「ヒッッ！」  
アんなの腹が突然膨らんだ

「…おやおや今日は、どうやら  
ダブル出産シーンが拝めそう  
ですな」  
「あの二人は優秀ですよ  
客を集めるには申し分  
なしです」



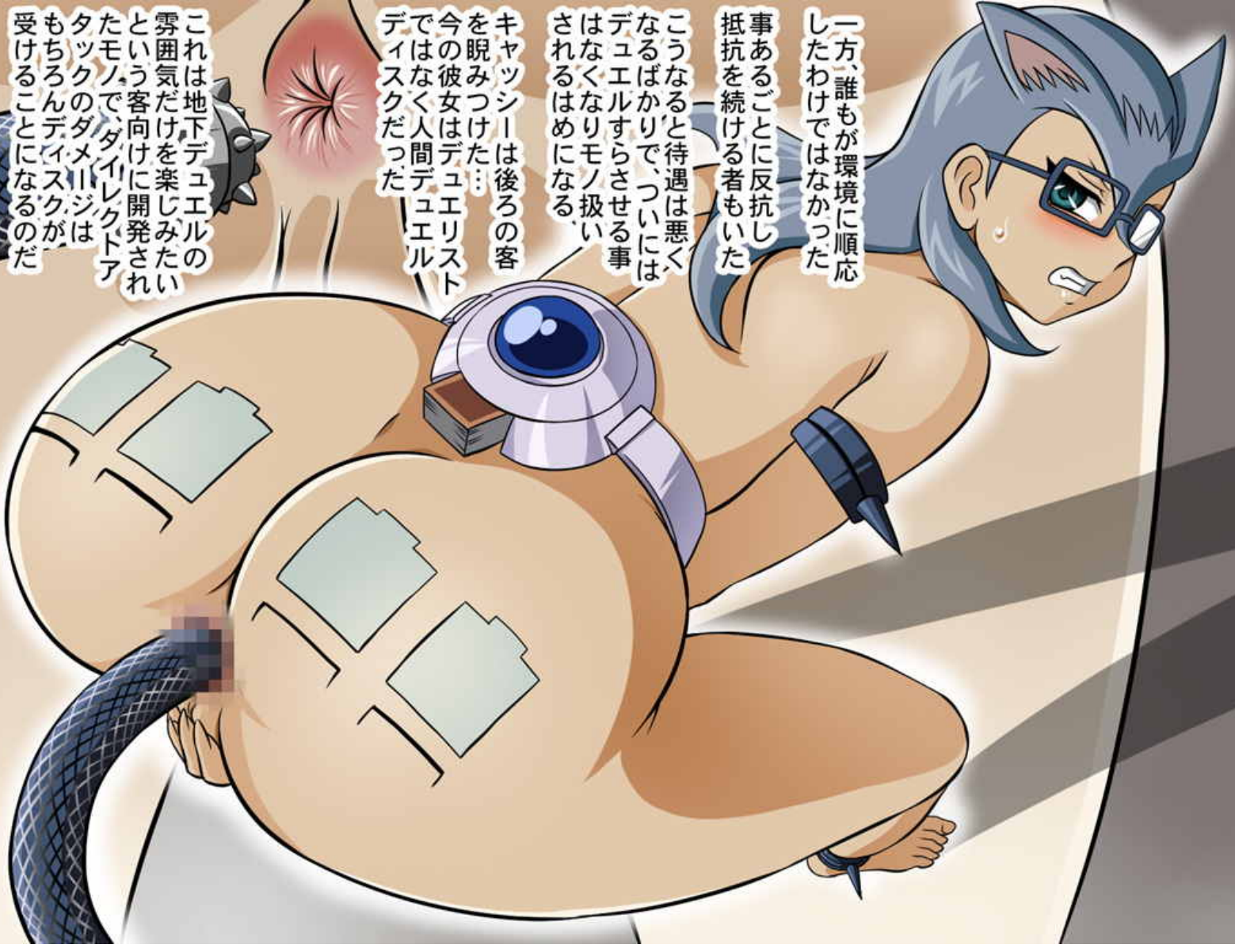
一方、誰もが環境に順応したわけではなかった

事あるごとに反抗し抵抗を続ける者もいた

こうなると待遇は悪くなるばかりで、ついにはデュエルすらさせる事はないモノ扱いされるはめになる

キャッシーは後ろの客を睨みつけた……今の彼女はデュエリストではなく人間デュエルディスクだった

これは地下デュエルの雰囲気だけを楽してみたいという客向けに開発されたモノで、ダイレクタアタックのダメージはもちろんだが、デュエルディスクが受けることになるのだ



またデュエルの成績の悪い者  
には別の使い道があった

新カードや新効果の実験である

十字架に括りつけられた小鳥は  
恐怖に顔を歪めていた  
これから彼女に何が待ち受けて  
いるのか…





「はく、小鳥ちゃん準備はいいかなあ」  
白衣にデュエルディスクをつけた男が妙に  
軽い調子で話しかけながら小鳥の前に立つ  
「では早速始めるよ」

「ナノベノムシリンダーを召喚！」  
小鳥の前に現れた注射器が小鳥の胸に突き  
立った

「ひッー」  
注射器からなにかが小鳥の胸に流れこんでいく  
それにつれて小鳥の小さな胸が、ビクビクと  
脈打ちながら膨張していった





「よし準備は完了つと  
次はスペルマワームRとGを連続召喚！」

今度は小鳥の前に赤と緑の触手が現れた

「さあ攻撃しろ！」

男が命令すると二匹の触手状のモンスター  
は、小鳥の胸に襲いかかる

「きゃあ！」  
二匹のモンスターは小鳥の乳首に突き立ち  
乳房内に潜り込んでいく  
膨張した小鳥の乳房の先端は、乳首という  
より穴になっておりモンスター達はそこに  
ずぶりと挿入された形になった



二匹のモンスターは、小鳥の乳房内に  
なにかの液体を吐き出すと入れ替わる  
ように萎んで消えていった

「え？胸の中になにかいる……」

小鳥が訝しげな声を上げると同時に  
再び乳房が膨張を始めた

「ひっ！やっぱりなにかいる！」

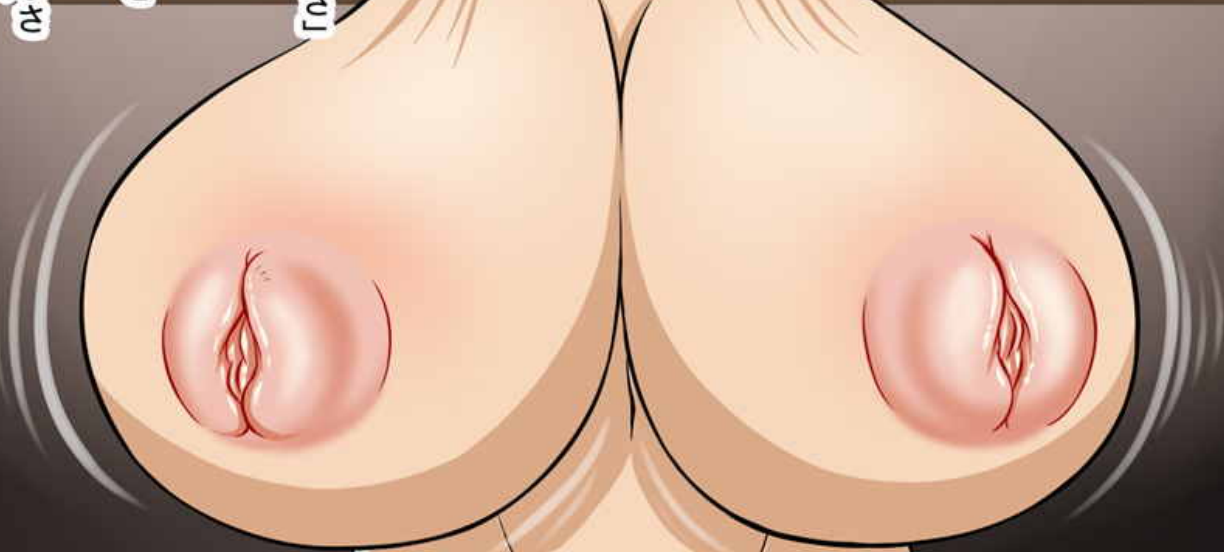
左の乳房にはなにか脈打つモノが、右  
の乳房には蠢くモノが、確かに感じられた

「んふふ…そいつは君とモンスターの子供さ」  
白衣の男が含み笑いをしながら答える

「？…な、なんなの！」  
悲鳴をあげる小鳥の乳房は、いまや傍目でも  
はつきりわかるほど中になにかいる動き  
で膨張していく

「こいつはね。人体に存在しない器官を生じさ  
せた場合、どんな反応するかの実験なんだ。  
いま君のおっぱいには、子宮の機能がついて  
いるんだよ。さあ子供を産んでみたまえ……」

「そ、そんなのいやアッ！」

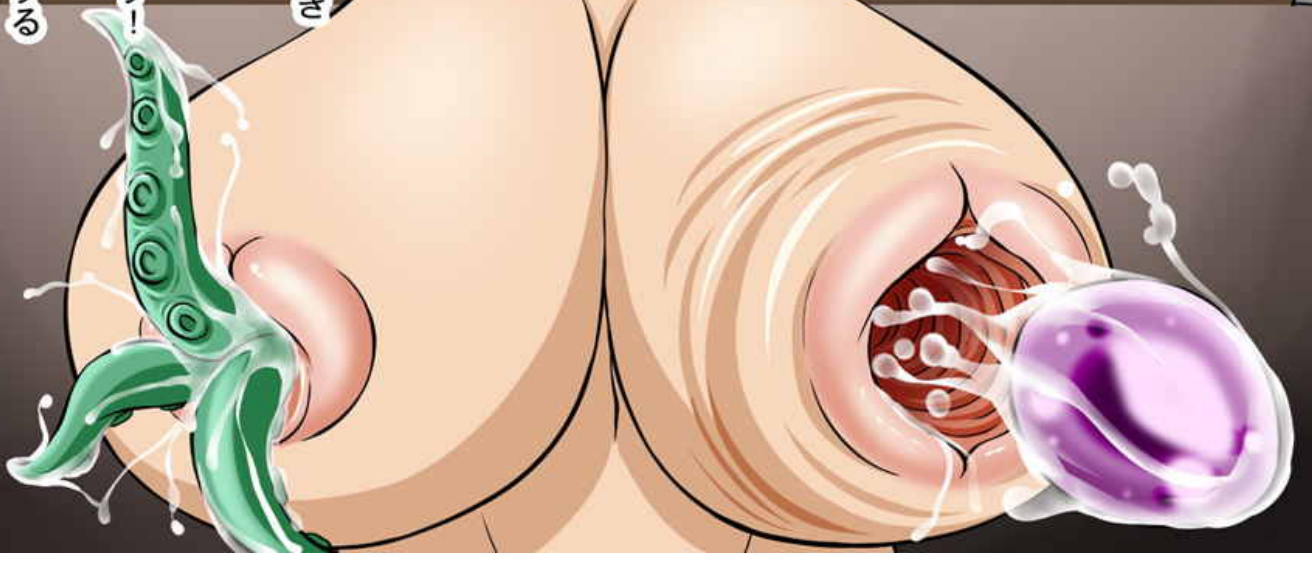


小鳥の乳房の膨張が止まった  
だが乳房は、それ自身が生き物のように蠢き  
振動を繰り返している

「いやあッいやあアアッ!もう許してえ!  
なんでも言うこと聞きます。!!  
なんでもします!デュエルも強くなります!  
だからこんな怖いことやめてえッ!」

胸の異物感に小鳥は半狂乱になって哀願する

だがついに出産の時がきた  
左の胸からは収縮する半透明の卵が、右の乳房  
からは何本もの触手が飛び出してきた  
「イヤアああああアアアアアッ!」  
小鳥は絶叫するとガクリと気絶した







地下デュエルが行われる  
地下闘技場に四人の新人  
デュエリストたちが入場  
してきた

いずれも美しい全裸の少女たち  
だがその目は暗く淀み  
濁りきっていた

それは自分たちが、生き  
残るために相手を犯し  
蹴ることには一切の躊躇  
いのないケダモノ達

悲鳴をあげのたうち回る女達の映像を見て  
セレナは眉をじかめた

「どうだセレナよ…他の次元ではこのような  
恐ろしい所業が絶えず行われているのだぞ」  
後ろからプロフェッサーが声をかける  
「おまえも女だ。ただデュエルが強いだけでは  
他の次元の餌食となるう…気をつけることだ」

「ふん!!…こんな連中に私が負けると?  
ところでプロフェッサー…なぜこの女達は裸で  
苦しんでいるのだ?どうもそこがよくわからない  
のだが」

「それを教えるために今回裸になってもらったのだ  
戦いたいのであれば、この訓練に耐えられるように  
なっから行くがよい」  
「わかった…」





「あっ…あうっ…」  
セレナは尻を上突き出した姿勢のまま  
びくびくと痙攣していた  
尻穴と膣がぼっかりと穴をあけ中から  
白濁した汁がごぼごぼと溢れる

「セレナ…この程度でこんなさままでは  
とても実戦には出せんな……」  
明日もこの時間に訓練を行うので  
準備しておくように」





「ほ、本当にデュエルに勝てば  
帰してくれるのね？」

「ああ、約束は守るとも…ふふ…」

今日もまたひとりの少女が  
裏アカデミアの魔の手に  
落ちようとしていた





「伏せカードオープン！  
マジック『強制妊娠』！」

「な、なんなの！？これえッ！  
膨れ上がった己の腹を見て  
袖子が悲鳴をあげる

「さあモンスターを産み  
落とすがいい……！」

「いいやあああッ！」

幾人もの少女たちをその闇に  
飲み込み続ける地下デユエル  
の世界……その世に終わりか  
くることはあるのだろうか……



END